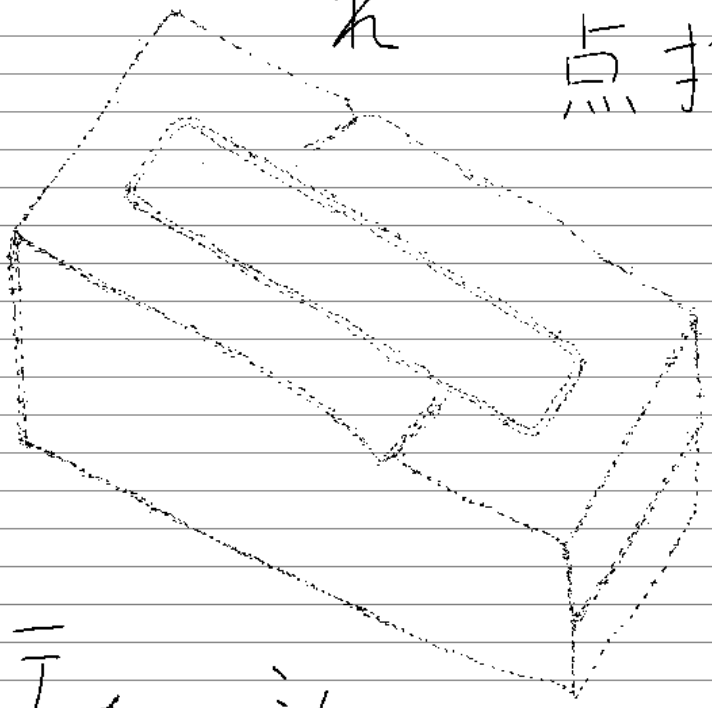
それは点描



小金井ささら

ティッシュ箱

2011/09/04

それは点描ティッシュ箱

らいんなっぷ。

２ページ・３ページ　→　静かなお昼流星群
４ページ　→　この蝉時雨散る頃に
５ページ　→　おひるごはん
６ページ　→　開いた胡麻では戸は閉じる
７ページ　→　土曜日のくせになまいきだ
８ページ・９ページ↓
台風が近付いてきている。世界のたがが外れたかのように
流出する港には、今はただ空白が存在している。
１０ページ　→　糖分が抜けただけのただの檻
１１ページ　→　それは点描ティッシュ箱
１２ページ　→　蛍光灯遠くに
１３ページ　→　前夜
１４ページ　→　真球フライングオブジェクト
１５ページ　→　Math.sqrt(3)
１６ページ　→　さっさと知ればいい
１７ページ　→　あとがき
１８ページ　→　奥付

それは点描ティッシュ箱

静かなお昼流星群

空はまだ青い。南西には太陽。
だけどそこに流れ星がひとつ。
僕は見つけて声を出す。
「あ、流れ星」
友は必死にお願いしている。
だけどその言葉は聞き取れない。
「願い事は落ちた場所の言葉で言わないと効果が無いんだよ」
そんなの聞いたことが無い。

空はまだ青い。南西には太陽。
そこに流れ星がふたつ、みっつ。
僕は撫でるように手を差し出す。
友は掴むように手を差し出す。
「流れ星を捕まえたつもりになると、願いを叶えられそうな気がしてくるね」
実際に捕まえたら間違いなく火傷する。

空はまだ青い。南西には太陽。
そこに流れ星が、たくさん。
僕は見つけて声を出す。

「流星のシャワーだね」
友は願いののちに声を出す。
「シャワーというよりむしろ滝でしょ」
願いの数だけ見えるらしい。

友のツインテールがぴょこんとはねる。
「あ、うしろ！」
僕は一人で回れ右。

僕らの背後にあったもの。
それは数多の流星群。
無音で流れる流星群。

友は願いをやめていた。
「ひとつだけ、お願いがあるの」
「誰に？」
「……あなたに」
空はまだまだ青いのに、
彼女の頬だけが夕暮れだった。

僕と彼女の流星群。
静かなお昼流星群。

この蝉時雨散る頃に

弾けて消える　夏の雨
それはどこかに　逝ったのか

川のせせらぎ　森の息吹
優しい声が　包み込む

ゆれる世界に　身を任せ
静かなひととき　感じ取る

生命の流れ　巡りゆく
この蝉時雨　散る頃に

おひるごはん

おひるごはん　たべそこねた
おひるごはん　たべそこねた
かえりがはやい　そのせいで
おひるごはん　たべそこねた

あぁ
おなかすいたよ
わたしのたいせつな
おひるごはん

開いた胡麻では戸は閉じる

眼前の戸は壮大で　開ける苦労は人知れず
喉をからして努めるも　その戸は態度を変えはしない

箱を押しても意味はなく　むなしい音が響くのみ
鋼鉄の戸はひたすらに　来る者全てをただ拒む

開いた胡麻では戸は閉じる
戸を開けるのは　鍵一つ

土曜日のくせになまいきだ

土曜日なのに　雨が降る
お出かけ日和も　台無しで
明日に延期　したいけど
明日は明日の　風が吹く

土曜日なのに　空暗く
傘さし運転　できなくて
早く晴れろと　願っても
風は冷たく　流れてく

土曜日のくせに　なまいきだ
今からお出かけ　間に合わない
土曜日のくせに　なまいきだ
叫んで嘆く　昼下がり

台風が近付いてきている。世界のたがが外れたかのように流出する港には、今はただ空白が存在している。

台風が近付いてきている。
道と呼べるものはすでに一酸化二水素の中で、それに浮かぶ何かは、なすに任せて消えてゆく。

剣山に貫かれて死んでいる存在は、台風が去っても戻ってこない。
いずれここにも雪が降って、この死体も埋もれるのでしょう。

空っぽになった港には、誰があけたのか穴があいていて、
そこから大切なものが失われていっている。

恐怖という感情は植物にもあるのかな？
そう問い掛けたけど答えは返ってこない。
そして樹は倒壊していく。
いつかこの樹も世界の隙間から消えていくのかな？

もうすぐ台風がやってくるよ。
雲はその予感に心を躍らせて、重力に従って滴を振り下ろす。

滴は万有引力と空気抵抗に挟まれながら、変わらない速さで水たまりに消えてゆく。
そして水たまりは流れをなして、夢と現の境界に吸い込まれてゆく。

ゆく、ゆく、ゆく。
みんなどこかにゆく、ゆく。
それが時間というものなのかな？

でもね。
時間もどこかに消えてゆくんだよ。

台風はみんなを包み込む。
空間の向きがわからなくなっても、なすにまかせて。

怒りも悲しみも、喜びも幸せも。
台風は静かに流していった。

台風が世界の隙間に帰っていって。
残ったのは、何もないただの空白。

糖分が抜けただけのただの檻

檻から糖分が逃げ出した。
水溜りに心中した糖分は、誘拐されて溶解した。
その行く先は誰も知らない。

残された檻はただの檻
糖分が抜けたただの檻
今日も誰かを閉じ込めて
前よりちょっと厳しいな

それは点描ティッシュ箱

ただのティッシュ箱じゃあないんです。

誰にも触れることすらできないのです。

――それは点描ティッシュ箱。

鼻をかみたくなったなら、ほかを当たってくださいね？

ただの点の集まりでしかないこのティッシュ箱は、

いつまでも――他のティッシュ箱が空になっても――開封すらされずに、残りつづける。

蛍光灯遠くに

蛍光灯遠くに　外を見る
路地は夜雨で　色づいて
すべる注意の　看板むなしく
人はそこで　ただこける

蛍光灯近くに　床の上
白く照らさる　色紙は
ひたすらまつ　出番なく
いずれか箱に　捨てられて

前夜

夜の街に、独り佇む。

遠くには曇り空が見える。少し前まで雨が降っていたが、今では……いや、晴れてはいない。

未来の希望――それが、目の前で消えようとしている。

絶対に失敗するわけにはいかないのだけど、みんなのやる気がなくて……。

こうしている間にも、無常に時は過ぎていく――。

この、少し生暖かい空気の中、私は。

迎えが来るのをただ待つばかり。

真球フライングオブジェクト

空に舞う　飛行物体
真球フライングオブジェクト

地上から　見てみると
円盤型に　見えなくもない

見つけた人　確実に
それをＵＦＯと　呼ぶのだろう

違うよ皆さん　落ち着いて
よーくそれを　みてみよう

ＵＦＯなんかじゃ　なくて
真球フライングオブジェクト

Math.sqrt(3)

まーす　すかーとかっこさん
Math.sqrt（3）

無限小数　果てしなく

繰り返される　こともなく

終わりなき旅の　始まりは

いってんななさんにーぜろごー
１．７３２０５……

まーす　すかーとかっこさん
Math.sqrt（3）

つかみどころが　ないけれど

彼と彼女を　掛けたなら

合わせて３人　仲良しです

まーす　すかーとかっこさん
Math.sqrt（3）

数多の因果　束ねるは

るーとさん
たったひとこと　√3

さっさと知ればいい

さっさと知ればいい　この世界のコトバを
さっさと知ればいい　この世界のミカタを

いつまでも　夢見てる　そんな、バカじゃ　あるまいし
いつまでも　夢見ない　絶望主義者じゃ　あるまいし

何もない日常を　ただ繰り返すのなら
すでにあなたは　死んでいる

嗚呼、隣人は　独りで空虚を食べている
嗚呼、先客は　何もせずに立ち去った

あとがき

こんにちは。小金井ささらです。

ついに初のコピー本です！　今回は詩集、１３編です。そのうち１編が再録なので、新作は１２編です。

まだまだ精進するところはありますが、これからもよろしくお願いします！

それでは、またお会いしましょう！

２０１１年０９月０４日

小金井ささら

奥付

「それは点描ティッシュ箱」

著者・印刷・製本　小金井ささら

2011年09月04日　発行

MailTo　kgneissr.contact@gmail.com
Twitter　@kgneissr
HomePage http://straight.suki-ari.net/ （ＰＣ・携帯電話 共通）

Thank you for reading!

初出一覧

「静かなお昼流星群」
文芸部誌「表現８７」(2011/05/02)

「この蝉時雨散る頃に」
「おひるごはん」
「開いた胡麻では戸は閉じる」
「土曜日のくせになまいきだ」
「台風が近付いてきている。(中略) 今はただ空白が存在している。」
「糖分が抜けただけのただの檻」
「それは点描ティッシュ箱」
「蛍光灯遠くに」
「前夜」
「真球フライングオブジェクト」
「Math.sqrt(3)」
「さっさと知ればいい」
書き下ろし

著者に無断での転載・複製等を禁じます……おねがいします。